

# 異邦の香り―ネルヴァル『東方紀行』論

野崎 敏著

フランス19世紀ロマン主義の第2世代に属する、ジェラルド・ド・ネルヴァル。その特異な光芒は、日本では中村真一郎、入沢康夫らが早くから高く評価し、2度も翻訳全集が刊行されてきた。

『東方紀行』は主として1843年のエジプト・シリア・トルコ旅行に基づく。とはいえ、先行するシャトーブリアンの聖地巡礼や、同時代のゴーチエによる絵物語風の紀行文を期待すれば裏切られる。旅人の体験談は、彼が現地で耳にしたらしい不思議な物語と錯綜し、それらが出任せよろしく無軌道な旅程のうちに織り込まれる。文学的定型から逸脱して魅力を発揮し続けるこの著作は、西洋による紋切り型の東洋観を裏切った希有の著作として、文芸評論家のエドワード・W・サイードも例外的な評価を与えた異色作だ。野崎の批評的エッセーは、この紀行の真価をその彷徨の旅程に探る。



(講談社・28000円)

▼のざき・かん 59年生まれ。東大准教授。著書に『ジャン・ルノワール 越境する映画』など。

## 混沌が生みだす詩的な錬金術

ウィーンの彼方の東方に「女の匂い」を探し求める旅人は、カイロではジャワ出身のセイナブという女奴隷を購う。だが安逸を夢見る白人のハーレム幻想は、この誇り高く気紛れな異性の意思によって完膚なきまでに粉碎される。

女性憧憬の挫折と、遁走劇。しかし東方遠征とは無縁な、この腰砕けの無力さが、東方の秘儀参入への秘訣だった。カイロの大モスクの廃墟に名を留めるドルーズ派の開祖、ハーキム。彼もまた現実の力リフとして無力であり、妹を奪われた蹉跎を代償として、神と一体化し、宇宙を彷徨する超常現象を体験した。このトリップは、パリで詩人自ら陥った精神錯乱の光景と、双子のように共鳴する。

ここにソロモン王時代の青銅鍔物師の物語が絡まる。陰謀に巻き込まれたアドニラムは、巨大な坩堝の制御を妨害され、事故故を起こす。だが溶けた青銅の奔流に巻き込まれた彼は「地球の心臓」に拉致され、やがて地下から生還して大業を成就する。この軌跡はフロイトの説く無意識の欲動への下降と昇華の途を予兆させる。制御を越える魔神「焔の命」の混沌に触れて翻弄される創造の狂気。

本書はネルヴァルの東方体験に潜む詩的錬金術を探り当てた。

国際日本文化研究センター教授  
稲賀 繁美